

1. 今、私たちがおかれている状況

南海地震と津波による次の被災シナリオが考えられる。震度6強以上の地域では、土砂災害が頻発し、地震に先行して台風などによる降雨があれば、被害はさらに大規模になるだろう。そのため、そこに位置する発電所、送電所、鉄塔、変電所が大きく被害を受ける。広域に停電しそれが長期化を余儀なくされることが起きる。施設被害を被らなくても都市ガス、電話、上水道も連鎖的に使用不可能になる。伝言ダイヤル・メッセージは立ち上がるが、一般加入電話、携帯電話は輻輳して使えない。四国四県は最悪1週間にわたって停電することを覚悟しなければならない。南海地震が明日やってくるとは限らない。長丁場の対策の実行こそが重要と言える。仮に、最悪の場合として東海・東南海・南海地震が同時に起こった場合、修理に要する期間は、上水道：17ヶ月、都市ガス：7ヶ月、電気：1ヶ月ぐらい最短でも必要かもしれない。(北淡活断層シンポジウム2008年1月12日 河田京都大学巨大災害研究センター長・教授)



大地震が発生すると、日々の暮らしを豊かにする文明の産物(住居、家具、自動車、電車などの交通機関、橋梁や高速道路などの建造物)が私たちの生命を脅かす凶器に変貌する。このように都市化が進むにつれて、被害の規模が拡大。過去の南海地震と、今後予想されている南海地震では、被害の様相が異なる。
(「地震の日本史」寒川旭著)



昭和の南海地震の体験を何度も聞かされた。「この世の終わりか」「立つこともできずに」など、その瞬間の怖さが伝わってくる。しかし、気をつけなければならないのは、昭和の南海地震が数ある南海地震の中で規模が小さかったという事実である。香川県全体が横に大きく揺れ、それが何分も続く。もちろん、地盤の良し悪しや、建物の形によっても揺れ方が異なる。とにかく、次の地震は、安政(1854)、宝永(1707)のように大規模になる可能性が高い。(四国新聞 H20・1.28月曜随想

「やがて来る巨大地震」寒川旭著)



南海地震の周期性を研究していくと、過去の小さな地震の後はずぐやってくる。過去大地震の後には長らくやっこない。このような点を考えると、昭和の南海地震（1946）は、小規模地震であったので、この後発生する地震は早くやってくる。80～85年のパターンでなかろうか。更に規模は「宝永」並みの大型地震を想定している。

（H19・12・5 高知大学岡村教授「見えてきた巨大南海地震の周期性」より）



2. かがわ自主ぼう春季研修会の開催

昨年の夏季研修会に引き続き第2回の研修会を、世界的に有名な「地震考古学」の寒川先生（高松市出身）をお招きして開催します。

是非ご出席いただきますよう、ご案内申し上げます。

1. とき 平成20年3月23日（日）13:00～15:50
2. ところ 高松市サンポート2番1 サンポートタワー4F BBスクエア
3. 記念講演 地震考古学からみた巨大南海地震

講師 地震考古学者 寒川 旭先生（香川出身）

4. 成果発表 産・学・地域連携、防災マップづくり
（香川大学工学部、香川 MMBF, 太田南コミュニティ）
5. 活動発表 かわにし自主ぼうH19総括と
次年度活動プラン（川西地区自主防災会）



<<地震考古学からみた巨大南海地震講演予定要旨>>

「地震学」と「考古学」を結びつけて1988年に誕生した「地震考古学」は、考古学の遺跡で地震の痕跡を研究する分野です。四国地域に、大きな被害を与える南海地震については、文字記録と地震の痕跡から、過去2千年間の歴史や、東海（東南海）地震との関係が分かり、21世紀中ごろまでに発生することが予想されます。この他近畿・四国において、活断層から発生した大地震についても紹介します。